

Eileen  
in  
Arkham

アイリオン

# 災厄娘inアーカム

新熊昇  
都築由浩

青心社



---

アイリーン  
災厄娘 in アーカム

新熊 昇  
都築由浩

---

青心社

災厄娘<sup>アイリリン</sup> in アークム

プロローグ

第一章 爆炎のサロメ

第二章 ミスカトニツク大学

第三章 嵐の中

第四章 セイレムのミズ・アーク

第五章 時計塔屋敷の惨劇

第六章 闇の貴公子

エピローグ

246 212 174 139 91 46 19 6 3

災厄娘 in アーカム



「失われたものは  
姿、形は変っても  
いつか必ず戻ってくる」

ケルトの古諺

## プロローグ

西暦二〇一二年六月四日（月曜日）

午後十一時五十分

メイン州 ウォーターヴィル郊外

『もう終わりにしろと言った筈だ。なぜ私に黙ってプロジェクトを進めた？』

対話用モニターに写った、星条旗を背にした男が、不機嫌そうに言った。

メイン州のウォーターヴィル近郊にある、パティール湖にほど近いある施設の地下である。

ある施設と言っても、看板は掛かっていない。

そもそも湖岸にいくつかある舗装ほさうされた道路のどれにも接しておらず、自動車ではすれ違ってもままならない未舗装の道路を森の中に入っていても、どこから敷地に入っているのかすら定かでない施設である。

昼間も夜も、建物に人の気配はない。

それもそのはず、地上にある建物はただの見せかけで、この施設の目的はすべて地下にある



からだ。

政府のある機関に属する生物研究所。それがこの施設の実態だった。

その地下五階にあるバイオセイフティレベル4の研究施設と思われるオペレーション・ルームでは、大勢の白衣の科学者が小走りに行き交い、壁の大きなディスプレイには、無数の化学式が表示されている。

厚さ二インチの鉛防弾ガラスの向う側では、複雑に交差しあつた何本もの精緻なロボットアームが、コアセルベートの入った透明な容器の中味を攪拌かくはんしていた。

『どうせまた失敗するのは分かつている。中止するのだ』

モニターの中の男が、強い口調で言う。

「長官、ムキになることはありません。我々は『医療用の人工皮膚と、iPS細胞の実験』を  
しているだけではありませんか。無害な実験です。それに、そう悲観したものではありませんよ。今回は、あのデータを使っているのですから」

ガツシリとした体格を黒スーツで包み、黒いサングラスをかけた顎髭あごひげの男が、おもねる風でもなく肩をすくめた。

『あのデータというと、あのデータか!? あれは使うなど言つてあつたはずだ。あんな得体の  
知れない物を使つて、どうなるかもわからないのだからな!』

長官と呼ばれた男は、ますます興奮したようだ。

だが、顎鬚の男の表情は変わらない。

「例えば『遺伝子組替えによる昆虫型生物兵器の開発実験』などと申し上げたら、今すぐ中止を命じられるでしょうけどもね。いや、それともっと予算をつけていただけたかも知れませんがね」

「貴様の考えていることはそれか！ 今になって、やっとそれを認める気か!？」

「いいえ。実のところ、わたしにもこれが何になるのかはわからないのですよ。使い物になってくれればいいとは思っていますかね」

「〈使い物〉とはどういう意味だ!? いったい、何に使うつもりだ?」

「なあに、ご安心下さい。結果がどうなろうと、長官には決してご迷惑をかけることはありませんよ。たぶん、ですがね」

顎鬚の男が、コンピュータを操作している助手に何か合図をした。モニターが消え、長官の声も聞こえなくなる。

「まったく。保身だけが大事な男には困ったものだ。これから世紀の瞬間だというのに……」  
顎鬚の男はそうつぶやいて、視線を壁の大きなディスプレイに移した。

そこに記された実験行程が、一行一行、完了を示す白抜きに変っていく……。

ロボットアームに掴まれた容器の中のコアセルベートが、徐々に黒い色に染まっていった。液体の中に混じり合わずにバラバラになっていた液胞がつながりはじめ、細胞の形になってい

く。

「科学者たちの間から「おお！」という小さなどよめきが上がった。

だが、顎鬚の男の表情は変わらない。

「ここまでは何度も見た。問題は、ここからだ」

そのことは、科学者達も判っているのだろう。彼らが創り出した黒い細胞から視線を外す者は一人としていなかった。

だが、数分経つても彼らが待っている出来事は起こらない。

顕微鏡レベルで拡大した容器の中の映像では、実験は成功しているように見えた。コアセルベートから生まれた細胞は次々と分裂してその数を増やしている。

にもかかわらず、誰も歓声を上げようとしなない。

彼らが待っているのは『動き』なのだ。細胞が生きていることが、肉眼で見えて判るほどの『動き』。それだけを、彼らは待っていた。

だが、それは起こらない。今度こそ何かが起こるはずだという確信が、もろくも崩れ去ってゆく。

「やっぱり、駄目か……」

顎鬚の男があきらめたようにそう呟いた、その時である。

灯りが、消えた。

彼らがいたモニタールームの灯りだけではない。鉛防弾ガラスの向こうの実験室の灯りも、全てのモニターの光も、コンピュータが動作していることを示すLEDの光も、すべてが一瞬にして消え失せた。

「なんだ!? 何が起こった!」

停電などあり得ない。なにしろこの研究所は、自家発電で全ての電力を賄まかなっているのだ。バックアップのためのバッテリーもある。こんなにいきなり、全ての電力を失うことは考えられないことだった。

もう一つ、あり得ないことが起こった。

鉛防弾ガラスの向こうの実験室で、真の暗闇の中にぼんやりとした光を放つものが見え始めたのだ。

どういわけかそれは、小さな人間の姿に見えた。

『あらあら。こんな、なのね。まあいいか……』

この場にいるはずのない、少女の声まで聞こえてくる。

よく見ると、光の中に奇妙な衣装をまとった少女の姿があった。アラビアの姫の衣装……。

「あ……あれは……。お前にも、見えているか?」

顎鬚の男に訊ねられたことに、助手はただ首を激しく縦に振って答えた。声の出し方を忘れてもしたかのように。

光の中の少女の右手が、容器の中の黒い細胞に伸びる。そして次の瞬間……。  
灯りが点いた。

コンピュータも動いている。再起動がかかったのではなく、ずっと何の問題もなく動いているように。

実験室は、すべていつも通りの姿に戻っていた。もちろん、少女の姿もない。

さつきまでのことが、まるで夢の中の出来事でもあったかのようだ。

顎鬚の男も研究員達も、呆然と研究室内を見回していた。

「あれを！」

誰かが、大きな声を出した。

全員の視線が、実験室の中の容器に集まる。

その中のひとつまみほどの黒い物体が、もぞもぞと動きはじめていたのだ。

「うまくいったのか？」

「今度こそ成功だ！」

さつき見た不思議な光景のことを忘れて、研究員達が歓声を上げる。いや、全員が、あれは自分だけが見た幻覚だと思おうとしてもいるのだろう。

喜びに包まれる研究室全体が凍りついたのは、次の瞬間だった。

さつきまでもぞもぞと動いていた黒い細胞の塊が、突然一つの姿を持ち始めたのだ。

ただの姿ではない。六本か八本かの脚を持ち、何枚かの薄い羽根のようなものを動かしている。「こ……これは……」

顎鬚の男の吹き声には、驚きとともに喜びの色も含まれていた。

だが、もしその喜びが意識してのものであったのなら、彼はすぐに後悔しただろう。

「あれを見ろ！」

研究員が、鉛防弾ガラスの向こうの容器を指差して叫んだ。

容器に亀裂が走っていたのである。

亀裂は見る見る大きくなって、すぐに容器そのものが砕け散った。

「警報！」

けたたましい警報音が、研究所全体に響き渡った。とつさに助手が通信を繋ぎなおしたのだらう。顎鬚の男の目の前のモニターに、『長官』が再び現れる。

『何が起こったのだ!?!』

『実験が成功したのですよ。お喜び下さい』

『しかし、その警報音は何だ!?!』

『一時的な混乱です。実験には影響ありません』

『本当に大丈夫なのか!?!』

『ごあんし……』

顎鬚の男の声が、そこで途切れた。呆然とした表情で、視線が何かに貼りついている。

砕け散った容器の中から出てきた（もの）が、四枚の羽根を激しく動かして実験室内を飛びはじめたのだ。体長一インチほどの黒い小さな羽虫のようにも見えるが、それは間違いなくついさつきまで細胞の元の原形質だった（もの）なのだ。

「まさか、こんなに早く？ 信じられない……」

顎鬚の男の唇から、絞り出されるように驚嘆の声が漏れた。

それはもの凄い勢いで実験室内のマジックハンドに体当たりすると、それらをことごとくへし折った。

それだけではない。次には研究室と実験室とを隔てる厚さ二インチの鉛防弾ガラスに体当たりをはじめたのである。

ミシツという嫌な音が、研究員達の耳に届いた。

「気をつけろ！」

「に……逃げた方がいいんじゃないか……」

「大丈夫だ！ AP弾でもこのガラスを破ることは出来ん。ここは安全だ!!」

顎鬚の男の声に、パニック寸前だった研究員が落ち着きを取り戻す。

「カメラは回っているな！ データを集めろ」

「第二研究室から催眠ガスを持って来させろ」

口々に指示が飛ぶ中、何度か体当たりを試みた黒い羽虫が、これまでと違う行動をはじめ。顎鬚の男の目の前の鉛防弾ガラス表面に、ピタリと吸着したのである。

「今度はなんだ？」

次に起こった出来事には、さすがの顎鬚の男も我が目を疑うことになった。

羽虫が吸着したガラスの表面が溶け始めたのだ。

一部の昆虫には体内にある種の酸を持つものもある。だが、いかなる酸であろうとも鉛防弾ガラスが溶けることなどあり得ない。

とすれば熱か？ しかし、このガラスを溶かすには八〇〇度以上の熱が必要なはず……。

それなのに、黒い羽虫は厚さ二インチのガラスの表面を溶かして泡立てながら、ドリルのようにじわじわと中に喰い込みはじめている。

「ば……馬鹿な！」

誰かが悲鳴のような声で叫んだ。

ピシツという甲高いいやな音がした。

ガラス面に弾痕のような同心円の模様を描いて穴をあけ、「それ」は研究室内へと飛び込んでくる。

その場はたちまち阿鼻叫喚あびきょうかんの坩堝つぼと化した。

ぶーんと言う耳障りな音とともに「それ」は弾丸のようなスピードで飛び回り、科学者達の



頭部を次々と貫通していったのだ。

「これは一体何だ！」

「助けてくれ！」

「何とかしろ！」

顎鬚の男が胸のホルスターからマグナムを引き抜いて数発発射するが、当たらない。相手があまりにも速すぎるのだ。

いや……。

瞬間的に黒い羽虫の動きが止まり、顎髭の男の弾の最後の一発が命中した。

「やった！」

誰かが喜びの声を上げる。

黒い羽虫は瞬間的にグチャリと潰れ、壁に張り付いた黒い染みとなった。

（何かが妙だ……）

命中させたにもかかわらず、男は奇妙な違和感を感じていた。

確かに弾は命中した。黒い羽虫はぺちゃんこに潰れて壁に張り付いている。だが、弾はどこに……？

そんな疑問が頭をよぎった次の瞬間、彼は我が目を疑うことになる。壁に張り付いた黒い染みが、動き始めたのだ。

それはむくりと盛り上がると、呆然と見つめる研究者達の目の前で、元と同じ羽虫の姿に戻る。いや、厳密には同じではない。

大きさが、さつきとは桁違いだ。さつきはせいぜいハチほどの大きさで、激しい動きのせいでどんな姿をしているのかよく見えなかった黒い羽虫。それは今は、子供の手のひらほど——大型のクモに近い大きさになり、半球形の胴体、八本の脚、そして四枚の羽根を持つことまではつきりと肉眼で見取れるほどになっている。

「あ……」

顎髭の男の唇から、呻き声が漏れた。

同時に、羽虫が再び壁から飛び立つ。

「に……逃げろッ!!」

「助けてくれえっ!」

再び起こった阿鼻叫喚は、さつきとは比べものにならぬ騒ぎとなった。

床に散らばる脳漿のうじょうと血、そして次々と床に倒れる白衣を血に染めたスタッフたち。

『ヴァンデルマール君』

非常ブザーが鳴り響く中、モニターの向うの〈長官〉は眉一つ動かさず冷たい声で、頭を抱えて床に伏せている顎髭の男に向かって言った。

『確かに実験は、予想以上の成功を収めたようだ。だが、その実験はあくまで君が勝手にやつ

たこと。私は一切関知しておらんことだからな」

「いいえ、長官。実験は成功しておるんです。少しばかりの手違いはありましたが」

『手違いだと？　そもそも君は、事態を把握しているのかね!?』

「もちろん……」

ヴァンデルマルの声が途中で途切れたのは、研究員の悲鳴が聞こえたからだ。

「外に……外に出たぞ!!　全館に警報を！」

見ると、研究室内を血の海に変えた黒い羽虫が、さつき鉛防弾ガラスに穴を開けたのと同じように、四インチ以上の厚みがある鋼鉄のドアを溶かして外に出て行くところだった。

ドアの向こうから、自動小銃のこもった発射音が聞こえてくる。さつき鳴らした警報で、警備員が待機していたのだろう。

だがそれも数秒のこと。いくつもの断末魔の声とともに、すぐに静かになる。

「ふ……不手際はありました、まだ事態を收拾するのは可能かと……」

事ここに至つてついに、ヴァンデルマルの顔から滝のような汗が噴き出していた。

「念のため、既にMK77ナパーム弾を装備したヘリ部隊をそちらに向かわせた。その施設は放棄する。生き残りたければ、自力で脱出したまえ。ただし、実験体を施設外に出すことだけは絶対に避けるように」

長官がそう言い捨てて、今度は自分から通信を切る。

「ヴァンデルマルさん、ど……どうするんですか!？」

助手が蒼白な顔で振り返った。

ヴァンデルマルは苦々しげな表情で答える。

「決まっている。すぐに逃げるんだ。あの様子では、ヘリ部隊が到着次第ここは焼き尽くされる。救助は待つておれん。すぐに逃げるぞ」

もはや長官の命令などどうでもよかった。

とにかく今は、ここから逃げ出さなくては……。

ヴァンデルマルは、床に折り重なっているスタッフの死体の上を這いずるようにして、非常口に向かって動き始めた。

翌日、テレビではメイン州ウォータービル近郊のパティー湖岸で、大規模な森林火災が起こったことが報じられた。州警察所有で使われていない倉庫を含む二十エーカーが焼けたが被害者はなく、原因は自然発火であるというニュースだった。

第一章 爆炎のサロメ

二〇十二年六月六日（水曜日）

午後六時

マサチューセツ州、アーカム

ミスカトニツク大学講堂

玉座にある男の二つの瞳が、わたしの姿態に釘付けになっている。

優雅な身のこなしで三枚目の青いヴェール——厳密に言えばシヨールに近い——を肩から外し、誘うように男に向かって差し出してから、床に落とす。

わたしはサロメ。美しいユダヤの王女。

目の前にいるのは王にして義理の父親、ヘロデ王。

その王に向かってわたしは言う。

「王よ、あなたは誓約された。わたくしはヨカナーンの首が欲しゅうござります」  
預言者ヨカナーン。愛しい人ヨカナーン。わたしを拒絶した男、ヨカナーン。

しふる王を促すため、わたしは誘惑の舞を踊りながらも一枚緑色のヴェールを肩から取って彼の足下の床に投げ捨てる。

「ええい。王女が欲しいというものを、渡してやれ」

ついに心が折れて、王が近衛の兵に命じた。わたしに向かつて続ける。

「この報い、いずれ禍が汝の身に降り注ぐであらうよ」

呪いの声をかき消すために、わたしはさらに一枚黄色いヴェールを脱ぎ捨てた。胸元に光るダイヤモンドを別にすれば、わたしの身体を覆っているヴェールはあと、淡い橘色と純白の二枚を残すのみ。

丸く突きだした胸が、細くくびれた腰が、そして引き締まったヒップが、わたしのすべてが薄布越しにあからさまになっているだろう。

そのわたしの目の前に、銀の大皿に載せられた禍禍しい物が差し出された。

その〈物〉に、真上からスポットライトが当てられる。

固く目を閉じたまま黙して語らぬ髭面の男の顔。預言者ヨカナーンの生首。

「おお……」

わたしは歓喜の声を漏らし、銀皿を捧げ持つ兵士を回り込むように王の前に進み出て橘色のヴェールを手渡した。かわって、生首を載せた銀皿を受け取る。

首から流れ落ちたどす黒い血が、銀皿いっぱいにあふれている。

スポットライトに照らされる中、その大皿を頭上に捧げ上げた。銀皿からしたたり落ちた血しぶきが床に撥ねて、『七つのヴェール』の最後の一枚、純白のヴェールを真紅に染めていく。

フランス語で演じられるオスカー・ワイルド作の戯曲「サロメ」。

新約聖書を元にした、ユダヤのヘロデ王の義理の娘サロメが（洗礼者ヨハネ）として知られる預言者ヨカナンに恋をし、拒絶され、ついには王をして彼を殺させる物語。

アイヴィー・リーグの謝恩会の演し物としても申し分ない格調高さで、アカデミックな演目のはずなただけ……。

（これは、あんまりだわ）

わたしは自分の衣装を見おろして、何度目かの嘆息を心の中で漏らした。

今日わたしが着ているこの衣装は、いまやニューヨークで新進気鋭のカリスマ・デザイナーとなつている美術学科の卒業生がアーティスト魂にかけて作り上げたもので、七枚の色違いのヴェールを重ね着するものだった。最後の一枚は、純白の正絹。

そのアイディアは、まあ、いいわよ。

大胆な切れ込みのスリットから、細い腕かいなや雌鹿のような脚が出ては消え、ふくらみを強調するような立体裁断が施された前身頃は形のよいふくらみに押し上げられてほんのりと桜色の蕾つぼみが透けて見えるほど薄い。

これじゃあ、まるでストリップだわ。

ローマ風の大理石の円柱と、低い階段をしつらえた「ユダヤ王の饗宴の間」のセットには、文学部長扮する寛衣姿に金の杯を手にしたヘロデ王と、ラテン語の教授が演じるその妻ヘロデア。

満員札止め、通路も立ち見でこつた返す観客席の卒業生、在校生、教職員が固唾を呑む前で、わたしは処女が眺めるのにはふさわしくないものをじっと見つめていた。

「綺麗な人ね。演劇部員かしら？」

「いや、パンフレットでは演劇部顧問のアドラー先生ってことになってるけど、なんでも友人が代演しているらしいよ」

「へえ……。じゃあ学外の人？」

「そうかもね」

客席のささやき声が聞こえてきた。そう。本来わたしはここにいるはずじゃないのよ。

わたしの本当の名前はアイリーン・ウエスト。

ブラウン大学考古学部の助教……というのは先月までのこと。新学期から晴れて母校ミスカトニック大学の准教授として教鞭を執ることになり、つい半月ほど前にこのアーカムに帰ってきたばかり。



そんなわたしが舞台上に立つ羽目になったのは、全面的にサラ・アドラーが悪い。

自分で主演するつもりで演目と配役と衣装を全部決めたくせに、階段から滑り落ちて脚を痛め、よりによってわたしに代役を頼んできたの。それが三日前。

彼女は、わたしがこのミスカトニック大学の学生だった頃の同級生。他の同級生とはほとんど音信不通になっているけれど、彼女は昨年からここで講師をしていたから、わたしの赴任が決まっただけに連絡をとって、学校のことを色々教えて貰っていたの。今じゃ、卒業以来のブランクなんてなかったかのように親しくなっている。

なにしろ自分の事情での代役依頼だから、目上の人にも後輩にも頼みにくくてわたしのところに来たのだらうと、最初はそう思っていた。どんな嫌な役回りでもわたしには彼女の頼みを断れない目算があったことなど、思いもよらなかつたわよ。

そして、実のところわたしは不本意なまま、彼女の目算通り断ることもできずに、この舞台で身体をくねらせて踊っている。

真っ白だったヴェールは裾から徐々に紅い血の色に染まり、べつとりと身体にまとわりついてくる。

ふとももからお尻の上まで、自慢のボディラインが衆人環視に晒されていることだろう。

(さぞかしセクシイな眺めでしょうね)

わたしは後悔していた。

この踊りが恥ずかしいからだけじゃなく、むしろこの主人公に共感できないから。

聖人に恋をしてしまうのはまあいいとしても、相手に拒否されたからって父王に殺させて、その生首にキスしようだなんて……。耽美的で背德的な芸術作品。だけどキャラクターは難解すぎて、凡俗のわたしにはまるで理解できやしない。

ただこの場面だけ、自分の性的な魅力で男を操り、その快感に酔うこの場面だけは、かろうじて共感できた。

その共感のおかげだろう。わたしの演技に熱が籠もりはじめる。

「あれで突然の代演？」

「神の御意志ってやつかも」

客席の囁きが耳に届く。サロメがヨカナーンの生首を乗せた銀の大皿を捧げ持ちながら、バレエのプリマドンナのようにくるくると回り、酔いしれたように膝をつく。

「……これをどうしようと、わたしの思いのまま。犬にでも、空の鳥にでも投げてやれる。

……ああ、ヨカナン、ヨカナン、おまえこそわたしが愛したたった一人の男だった」

形の良い唇から語られる流暢なフランス語の台詞。これがヘブライ語なら、二千年前のユダヤの王女がそこに甦ったかのようにだったろう。

「……おまえは自分の神を見ただろう。ヨカナン、でも、わたしを、このわたしを、おまえ

はどうとう見てくれなかった。もし一目でも見てくれたなら、おまえもわたしを愛してくれたら  
だろうに」

用意周到にオペラグラスを持参した観客たち——特に男性の——は身の幸運を言祝いでいる  
に違いない。

紅く染まつた薄布越しに、双丘の頂にある小さな突起まではつきりと見てとれるだろうから。  
(むしろ、その方がありがたいわ)

わたしは半ば開き直っていた。この場でわたしの正体に気付かれるよりは、数倍まし。

(せっかくの宝石だもの。これならよく見てもらえるでしょ)

衣装の一部として私の胸元で光っているダイヤモンドのペンダントは、ただの宝石じゃない  
のよ。

その名を『黎明の天使』という。中東某国の遺跡から発掘され、メソポタミアにあった古代  
王国の王冠にちりばめられていたものと言われている。そのダイヤモンドを首飾りにしたもの  
で、中央のダイヤは一二カラット。周囲を取り巻く一二個のダイヤと合わせて一三八カラッ  
トある。

古代王朝時代にはあるはずのない一四四面カットが施された謎のダイヤモンドで、調査のた  
めにミスカトニック大学に送られてきたものを明日から特別公開することになっている。

この公演に使用するのは、その特別展示の宣伝も兼ねている——らしい。これなら宣伝効果

は抜群でしようよ。

もう踊りも終盤。これが終われば芝居も終わる……。安堵しかけたわたしの耳に、客席右手から男子生徒らしい声が聞こえてきた。

「おい、あれ、もしかして来年から考古学部に来るウェスト先生じゃあ？」

思わず大きな舌打ちを漏らしそうになったわよ。できればその名はこの場では聞きたくなかったから。

生徒にはサマースクールの講義で数回会っただけだし、舞台化粧をしているから大丈夫だと思っていたけど、考えてみれば生徒に配られた新学期のガイドダンス資料にはごつてり化粧をした顔写真が使われていたんだった。

「あれが、新しい准教授？ まさか……」

女生徒の方は、舞台の上でストリップパー同然に踊っているわたしの姿と新しく着任する考古学部の准教授というイメージとが結びつかないでいるみたい。それなら、もっとセクシイにして見せれば、もっと印象がずれていくかしら……。

ふと頭に浮かんだ人の悪い思いつきに小さな笑みを浮かべながら、わたしは銀の大皿の上の生首に接吻しようと朱色の唇をゆつくりと近づけた。

(できればピアース・ブロスナンかオーランド・ブルームにしてほしかったわ)

今年一番多くの落第者を出した教養学部教授の髭面を象った蠟の生首を目の前に観て、そう

思った。

(せめて想像だけでももう少しマシな相手にしよう)

瞳を閉じて、別の顔を思い浮かべることにする。

七年前にファイ・ベータ・カツパの幹事会で知り合ったマサチューセツ工科大の院生の顔。どこの企業でも研究者として雇ってもらえるし、プライベートな研究室も持っている。大学でも准教授くらいにはすぐになれるはずなのに、四つめの博士号をとるために学生の身分でいるお気楽男。

(なんでリツキーの顔なんか……)

苦々しい思いを抱きながら顔だけは恍惚こうこつとした表情を浮かべ、捧げ持った大皿を徐々に顔に近づける。大皿を満たしていたヨカナーンの血演劇部 譚翠の血が、薄絹一枚羽織っただけのわたしの胸の谷間に零こぼれてはじける。

そして、今にも唇が重なろうとした、その時。

ポタッ！

舞台上に何か落ちてきたような重い音が聞こえた。硬い物じゃないわよ。肉の塊のような柔らかい何か。

蠟の生首に唇を押しつけながら、薄く目を開けて音の主を見る。

べつとりと拡がった血糊の中に、真つ黒い何かがあった。舞台の上の全員が、驚きの表情でそれを見つめている。

いや、ただ『驚きの表情』というだけでは不十分。そこには譬えたとようもない恐怖と驚嘆の感情がからみあうように交じっていた。

びくんッ！

黒い（何か）が動いた。

まるで鼓動する心臓のように。

こんなものは芝居に登場する予定はなかった……はず。一緒に舞台の上にいる他の出演者達の顔からも、それはわかる。

「ねえ、これ、何？ 何かの演出？」

念のため、わたしはプロンプの学生に小声で訊ねた。答えはすぐに返ってくる。

「いいえ。こんな演出は聞いていません」

（とすれば、これは、なに？）

明らかにアクシデントだけれど、観客はまだそれに気付いていない。さっきまでのわたしと

同じように、伝統的な『サロメ』ではない新しい演出か何かだと思つてゐるみたい。

猫ほどの大きさの黒い塊が、それ程危険だとは思えない。普通なら、このまま舞台を続けたほうがいいんだろうけど……。

でも、その時、わたしにはそれが極めて禍福しく、この講堂にいる人人はおろか地球そのものにまで危機を及ぼしかねないほどに危険な物のように思えたのよ。

「こ……この女、女の姿をした化け物だ。そうにちがいない……」

ヘロデ王の文学部長が、恐怖の表情を浮かべたまま視線をわたしに移し、芝居を続けようと台詞を口にした。だけどその声は、三日前のリハーサルの時よりもひどい棒読み。視線も例の黒い塊とわたしの顔と、それから客席との間と行ったり来たりしてしまっている。まるで心ここにあらずといったご様子。

「わ……わたしは娘を褒めたいと思います」

サロメの実の母、女王ヘロデアのラテン語教授も、同じようなものだった。

それでも舞台は黒い塊を無視して芝居を続けることに決まったようだ。その空気を感じ取つて、わたしは演技を続けようとした。

ところがそこに、聞いたことのない台詞が聞こえてきたの。

『我は光に背く者。光の道を知らず。光の道にとどまらぬ者。悩める者や貧しき者を殺す者。その顔に覆うものを当てる者！』

舞台の上の誰の声でもない。それはまるで、音響から流れてくるナレーションのようだった。「ああ、ヨカナン。わたしはお前と唇を重ねた。お前の唇は、苦い味」

その声にかき消されそうな小さきで、プロンプの学生の声が聞こえてくる。わたしはその台詞を繰り返すかわりに、もう一度小さな声で学生に話しかけた。

「台詞は憶えてるわ。でも、このナレーションはなんなの？」  
返ってきたのは、呆れたような声。

「なに言ってるんですか!? はやく台詞を言ってください!」

どうやら、あのナレーションのような声は、わたしだけに聞こえているようだ。言われてみれば、あれは耳から聞こえる音ではなく、まるで自分が考えているかのような感じで、頭の中に直接言葉が浮かび上がってきている。

でもそれは絶対にわたしが考えた言葉じゃない。なにしろ、見聞きしたこともなければ、今の場に関係ある言葉でもないんだから。

そのことに気付いて、わたしの目が再び〈塊〉を捉えた。驚愕と恐れと疑念に満ちた視線で。  
(この〈黒い塊〉が喋っているの?)

わたし自身の声とも違う。地の底から響いてくるような、恨みと妬みねたと嫉みそねとに満ちた声。想像すること自体が神に対する冒瀆ぼうとくと思えるほどに邪悪な声だった。

それがあの〈塊〉から聞こえてきているのかもという思いは、すぐに確信といつてもいいも



のになる。

血だまりの中、〈塊〉は明らかにわたしに向かつて近づいてきているのだ。その速度は徐徐に速くなり、今やはつきりと動いているのがわかるほど。

『……私は夜に家を穿つ者。昼は閉じこもりて光は知らぬ。我らには朝は死の陰の如きもの。死の陰の怖ろしさを誰よりも知る者……』

頭の中に響く声は、まだ続いている。

『我らすなわち滅びの日に残され、激しき怒りの日にたずさえ出されたる者。宝を呑みたれども、また吐き出されし者。神によりて腹より押し出された者』

蠟の生首を載せた銀皿を放り出して立ち上がりたかつたけれど、身体がびくりとも動かない。〈塊〉はもうすぐそこまで迫っている。

『我は地の上に並ぶ者のなき者。恐れなき身に造られた者。一切の高大なるものを軽視し、もろもろの誇り高ぶる者の王！』

「そいつ」は声なき哄笑を放った。演劇部謹製の血糊がほの暗く輝いたような気がした。赤く染まった大きな月の書割かきわりの、周りの空間を埋めるために騙したま絵ふうたまに描いてある「最期の審判」の亡者たちや「地獄編」の魍魎わうりやうが、それに呼応してざわざわと蠢いたような錯覚を憶えた。手を伸ばせば掴めそうなほどに近づいた〈塊〉が、ついにその目的を達しようとしている

……ことがわたしにはわかった。

立ち読み版はここまでです。

アイリーン  
災厄娘 in アーカム  
立ち読み版

---

2010年10月10日 初版発行

著者 新熊昇 ©  
都築由浩 ©  
発行者 青木治道  
発行所 株式会社青心社

〒550-0005 大阪市西区西本町1-13-38  
新興産ビル720  
電話 06-6543-2718  
FAX 06-6543-2719  
振替 00930-7-21375

<http://www.seishinsha-online.co.jp/>

---

© NoboruShinkuma 2010

© YoshihiroTsuduki 2010



アイリーン  
災厄娘 in アーカム  
電子無料立読版

無料

青心社

嚴重に警備された極秘研究所から逃げ出した異形のモノは遺伝子工学のパケモノ!! それとも遙か太古よりの悪魔なのか!! パケモノを追う政府機関の思惑と暗躍。

そしてミスカトニック大学の美しき新任准教授アイリーン・ウェストが召還する深遠よりの災厄の使者とは……!/? それはアーカムに何をもたらすのか……!/? 現代のアーカムに現れた怪物の生み出す悪夢と恐怖を描く。新しいクトゥルー神話の開幕!!

青心社

『<sup>アイリーン</sup>災厄娘 in アーカム』は、  
全国の書店でお買い求めいただけます。  
当社直販を希望の方は下記 url へ  
<http://www.seishinsha-online.co.jp>

